慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハリス編 社会科学者シュムペーター
Sub Title	
Author	山部, 徳雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.11 (1955. 11) ,p.896(64)- 900(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19551101-0064
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551101-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る程支出曲線は水平になる傾向がある。しかし都市と農村の支出曲線がそれほど差がないのは、中位の所得層をとつて見ただけではその支出構造を明らかにできない事實を物語るのではないか。農家の消費においては自家生産される食料と燃料及び自己所有の家屋の賃貸價値が重要な役割を占める。この種の所得は消費に對して貨幣所得と異なつた影響を與えると考えられるし、しかも後者よりは安定的であるから、これ等の項目を切り離して考える方がよいであろう。

問題は農家の消費支出と資本支出との定義にもある。農機具の補塡費や修繕費は明らかに資本支出であるが、多くの農家においては資本が一定に維持されることは少ないのでこの評價は難しい。そこで(a)これ等の項目を支出として計算し、資本の變動を調整するに足るだけの期間の支出を以てこれを修正するか、(b)資本支出を全く支出の中に計上しないで消耗した資本の額を支出に計算するかの代用法がとられる。しかし何れの方法でも正確な減價償却の計算法が必要であり、價格が安定しているときでさえ消耗した資本の價格を把捉し難いことは周知の事實である。更に(c)現在の操業費用だけを農家支出の中に入れ消耗した資本を無視するか、(d)現在の操業費と補塡及び修繕費だけを支出とするか、(e)全資本支出を支出の中に算入するか等の問題がある。ある年度の生産所得の增加の一部は inventory の增加となるであろう。この樣な事態が起る場合には inventory の變化を含む純所得を問題にするよりも、この中の純現金所得だけを問題とする方が良さそうに見える。inventory の變化を考慮しなければならないとすればその評價が問題となるからである。第三に農業支出と家計支出とはある程度まで結合している。自家消費の食料や燃料がこれである。かくてレイドは純現金所得とこれに對應する支出との關係を考察するのである。年所得五〇〇ドルにおける家計支出の彈力性を見ると、ニュージャーシー〇・三八九、ペンシルヴァニア〇・四四三、ミシガン〇・三八〇等で最高はカロライナの〇・七八一、最低はコロラド・モンタナの〇・一五七である。レイドの論文は相當に長く、ここにその全貌を紹介することはできないが、統計的把捉の難易から所得概念の修正をとり上げている面が强く、理論的考察が不十分な感じを受ける。最後のオーシャンスキーの論文はフリッシュ説の所得彈力性を修正しつつ都市農村の同等の生活水準を求めようとするものであるが、もはや豫定の紙數に達したので他の機會に紹介したい。（鈴木　諒一）

ハリス編

『社會科學者シュムペーター』

本書は、アメリカにおける十八人の著名な社會科學者によるシュムペーターについての好意あるしかも冷靜な分析である。その內容は、大きく五部に分かれている。第一部は、序論として編輯者ハリスが筆をとつている。第二部は、「人と學說」と題され、フリッシュ、スミシーズ、ハーバラー、サミュエルソン等によつて敍述されている。我々は、この第一部と第二部によつて、シュムペーターの人間性について知ることが出來る。就中スミシーズの、家庭的事情と社會的環境による性格の形成についての敍述と、ハーバラーの、第一次大戰の終りから一九二四年に亙るシュムペーターの政治的經濟的實踐についての分析は、興味あるものがある。

シュムペーターは、一八八三年オーストリーに生れ、十九世紀的文化の爛熟しているヴィーンにおいて教育をうけた。ヴィーザー、ボエームを師とし、バウエル、ヒルファーディングを友とする彼が、近代經濟學と歷史學派更にはマルキシズムとの華かな論爭を體驗したことはいうまでもない。この體驗は、彼に經濟學的方法の探求という使命を終生負わしめた。では、シュムペーターは、この方法論爭に對してどんな態度をとつたか。この問いに對する解答は、本書の全般を通じて初めて與えられるものである。しかし我々は、ここでこの問題に對する解決をまとめてみよう。結論を端的にいえば、シュムペーターは、歷史學派からはその歷史性を、近代經濟學からはその論理的精密性を、マルキシズムからはその體系の壯大さを攝取し、彼の所謂シュムペーター體系なるものを作り上げたのである。「すべてを理解することは、すべてを恕すことである」という言葉を以て彼は、その最初の書物（本質）の序文を始めている。方法的寬容は、彼の精神の一大特質である。しかもこの多樣性、複雜性にも拘らず、相對主義と冷笑主義に墮することなく、折衷的にではなく、自己の體系に統一的に攝取していつた彼の强烈な知的獨立性を見逃してはならない。神祕的ともいえる彼の統一的構成には、何人も驚かされる。現實には、無限の側面がある。過去において經濟學者の意見を分裂せしめたものは、少からず强調點の相違以外の何物でもなかつた。從つて二者擇一的な接近方法に對する寬容の程度が、事實上支配していたものよりも、大きければ大きいだけ、進歩も過去よりは、より大きくなることをシュムペーターは强調した。問題は、現實に對する分析である。「科學は、認識的な論爭點で勝負のつくまで斗つたり、またその後で兩者を共通の信條に改宗せしめたりすることによつて、論爭を越えて行くのでなく、具體的な問題についての實務的な勞作が、當面の仕事の性質によつて導かれる方向に沿つて續行されるといつた形でそれを越えて行くものである。」シュムペーターは、過去における經濟學者の意見を分裂せしめたものは、强調點の相違であり、それを生ぜしめたものは、科學以前の「イデオロギー的先入主」であるとする。從つて彼が、過去の理論を理解せんとする場合、その理論を創出した學者の性格をも研究對象とした。しかし問題は、それだけに終らなかつた。彼は「ヴィジョン」を科學以前の段階として、およそ知識の前進のためには不可缺のものであることを認識している一方において、科學的研究は先入主を排除し、客觀的な眞理を啓示しうるものであつてほしいとも考えた。シュムペーターの「藝術の爲の藝術」、「眞理の爲の眞理」の言葉の眞髓をここにみることが出來る。彼のあくことを知らぬ知的好奇心を知ることが出來る。しかし果して、それが人にとつて可能なことであるか。彼は、バベルの塔を建設せんとした。シュムペーターの眞の先祖は、聖トマス・アキナスであり、プラトーであるといつた人がいるのも當然である。所詮イデオロギーを排除することの不可能なことは、彼自身について考えれば解明することである。それにも拘らず科學者は、先入主を排除する爲に努力しなければならないとし、彼の遺著「經濟分析の歷史」において

イデオロギー的先入主を抽出して孤立化せしめるという仕事を彼自身推進した。しかし彼の仕事が進めば進む程、イデオロギーの重要性が愈々大きく浮び上つてきたようである。

以上方法論爭を背景とするシュムペーターの科學的認識の傾向と彼の精神の多樣性、複雜性、統一性更には矛盾性を本書の中からまとめてみた。シュムペーターは、知的好奇心から經濟學の研究を始めた。そして彼は、事物の凡ゆる側面を知ろうと欲した。その主知主義的科學觀が、彼を尨大なる博識家たらしめたことは論を俟たない。しかもそれらの知識は、彼が最も排除したがつたイデオロギー的先入觀、彼の强烈な先入觀の上に樹立された體系の中におさまつた。

「藝術の爲の藝術」を標榜し、その生涯の大半を學ぶことと、敎えることに過したシュムペーターは、實踐的活動に對しては無關心であつたか。この點についてまとめてみよう。

シュムペーターは、中産階級の子弟として生れ、當時の貴族の學校で學んだ。年少の彼は、この環境に壓倒されることなく、それらの習慣趣味をマスターしていつた。彼の生涯を通じて極めて顯著であつた完璧なものに對するパッションや知的獨立の精神は、ここで養成された。しかしシュムペーターは、普通の貴族の職業での成功が仲々難しいのみならず、彼の望んでいた知的生活を保證しないであろうということを知らなければならなかつた。彼は、貴族でもなければ、ブルジョアでもなかつた。しかし彼には偉大な知慧があつた。シュムペーターは、二十代彼の所謂「聖なる多産の十年間」において、主要なる三著書を完成した。このことは彼の學者としての地位を强固なものとした。そして當時のオーストリアの理論經濟學者の傳統であつた實踐的問題に參與していつた。その學問的早熟と若年にして政治に參與していつたことは、彼にとつて果して幸いしたものであつたか。彼の學問的體系が、二十代卽ち第一次大戰迄に完成されていたということは、驚くべきことではあるが、幸福なことではないかもしれない。何れにせよ、シュムペーターは、決して世にいうところの書物からのみ事態を見る型の人ではなかつた。彼は、實踐的活動にも充分な關心をもち、日々の政治的な成行きについて强く心を勞していた。そしてそれらについて語勢鋭く自分の所信を述べた。「租稅國家の危機」（一九一八年）なるパンフレットにおける彼の所見の發表はその好例である。一九一九年三月彼は大藏大臣となり、大戰後の危機に瀕していたオーストリア財政の再建に乘出した。シュムペーターは、ここで自己が知性の人であることを知らされた。彼の財政建直しの處方箋が、經濟的觀點から正しいとしても、政治には他の多くの要因が支配している。シュムペーターは、「今日までの財政政策が、問題の正しい解決策の採用を殆んど不可能ならしめていた」という彼の主張を再認識せしめられた。一九一九年十月大藏大臣を辭職した。ついで二年程後彼は、小規模ながら信用の高い民間銀行の頭取となつたが、一九二四年破産した。この實踐的活動の不運は、幸か不幸か彼をして再び學問的生活に歸る決心をなさしめた。そして彼は、ヴィーンを離れた。彼の日本に來る決意をしたのはこの時であつた。ついで一九二六年シュムペーターは、彼の愛する妻と敬愛おくあたわざりし母とを相續いて失つた。そのことは、彼に致命的なショックを與えた。以來諦觀と悲觀

主義とが、彼の性格の中に消し難い痕跡を止めることとなつた。「經濟發展の理論」の成功が第一次大戰によつて臺無しにされ「景氣循環論」の成功がまた第二次大戰のために失われたことや、ヴィーン、ボン、ハーバードと移つていつたこと等を思い合わす時、運命の子シュムペーターという感もないではない。

第三部は、「シュムペーターの經濟學」、第四部は、「一層廣い側面」という名の下に、シュムペーターの學問的體系の各側面が、十三人の學者によつて夫々專門の分野から分析批判されている。シュムペーター體系が第一次大戰迄に結實しているということは、他方にその弱點を明らかにしている。卽ち現代における最も重要な理論的展開の成果であるケインズ派經濟學や獨占的競爭論や計量經濟學のそれを活用することが出來なかつたからである。從つてこの方面からの批判が當然起つてくることは、シュムペーター自身充分了承していることである。（現代理論に對するシュムペーターの見解は、彼の遺著「經濟分析の歷史」やその他の雜誌論文において見ることが出來る。）しかしそれらの批判があるとしてもシュムペーター體系の偉大さは、決して損われるものではない。シュムペーターは、その分析において、マルクスを父としワルラスを母とすると述べているが、我々が彼の體系について强く感ずるのは、その歷史性である。彼は、「景氣循環論」の副題にもある如く、「資本主義過程の理論的歷史的統計的分析」を目的とした。歷史統計理論の三位一體という形で歷史的な事件を包括的に分析していつた點は、同時代の他の人々よりはるかに進んでいた。それにしても當時の分析技術は、彼のそのヴィジョンに充分に說明を與える程には進んでいなかつた。シュムペーターが、前述の書の序文で、「經濟學者の若い世代はこの書物を單に一つの乘越えるべきもの或いは出發點と看做すべきである」と論じたのも疑いなくそのような理由によるものである。

シュムペーターは、「企業者の革新的行爲」を中心として資本主義過程を分析した。その選良意識において、直觀的理想主義に基く一種の理想文化型とみられないことはない。しかし彼の理論は、二つの點で理想主義的立場の制約を越えている。第一は、革新者の數に關して、第二は變化過程自體に對する意識的關心の程度という點において、そしてそのことは、理想主義的範疇の制約を痛感せしめると共に事實上理想主義的立場の放棄を要求する如きものとなつている。初期（發展の理論）においてさえ、革新は、「集團の傳統の中で今日まで輝かしくも確立された技術を、ある個人が習得する過程と密接不可分の關係に立つ、巨大な社會的過程」として理解されている。そしてその革新は、循環過程に適用され、非連續的な變化ではなく、變化が、社會生活の全く普遍的な特徵として捉えられている。しかしこれらの見方は、シュムペーターによつて充分展開されていない。直觀的哲學の批判の最後の仕上げとか、理想主義と唯物主義とのディレンマの解決ということは、現今における最も大きな課題である。

第五部は、「二人の偉大な經濟學者」である。スミシーズによつて、現代における最も傑れた經濟學者シュムペーターとケインズの二人が論ぜられている。この二人については、我が國においても、既に多くの人々によつて論述されている。ただここでこの二人の經

濟學者が、その個性においてすぐれているのみならず、それぞれの學問的傳統の代表者（獨逸的と英國的）であることを強調しておきたい。その點ハロッドの「ケインズ評傳」には、興味深いものがある。

以上シュムペーターについて、私として興味ある點を、本書の中からまとめてみた。彼の知性に徹しようとした點しかも尙自己の體系を樹立する場合、企業者革新（それはまさに資本主義における英雄的行爲である）という選良意識に基いていたということ、それはやがて社會主義における技術的に周到に訓練された一群の管理者にとつて代られること、更には、その民主主義に對する見解が、どこまでも機能的であつたこと等思い合わす時、彼のイデオロギーが何であるかを、我々は知らされざるを得ない。とまれシュムペーターは彼の望んだ如く、乘越えて行かれるべき人である。我々は彼の學問の偉大さと共にその缺陷をも本書によつて知ることが出來る。

（中山伊知郎・東畑精一監修　坂本二郎譯　A判、四一七頁、定價六百圓、東洋經濟新報社）

（山部　德雄）

三田學會雜誌

第四十八卷　第十號　目次

社會保險の現狀とその改正計畫……園　乾治

「同一勞働同一賃金」の原則と婦人勞働問題……黑川俊雄

資料

西ドイツ中世における“Bauerntum”の形成……宇尾野久

——Codex Laureshamensis を中心として——

保險商品說の研究……庭田範秋

書評及び紹介

經濟學關係文獻目錄

經濟學關係文獻目錄

（昭和三十年七月刊）

理論・學說史・經濟思想

＊サムエルソン　經濟學講義上下　改訂版　川田壽著　A5　上　二九六頁　三八〇圓　下　二七二頁　三五〇圓　（三和書房）

＊經濟學　加藤一雄著　A5　二三七頁　三二〇圓　（三和書房）

＊平易な基礎經濟學　改訂版　佐原貴臣著　A5　二六〇頁　三三〇圓　（三和書房）

＊價値の理論　白杉庄一郎著　A5　三一七頁　四五〇圓　（ミネルヴァ書房）

＊景氣・不景氣　長州一二著　B40　三四二頁　一七〇圓　（新評論社）

＊近代經濟學の革新　經濟學說全集12　ケインズ　小泉明編　A5　三九四頁　三四〇圓　（河出書房）

＊乘數理論と加速度原理　サムエルソン著　高橋長太郎監譯　A5　一二一頁　二〇〇圓　（勁草書房）

＊經濟變動の理論　園田實著　A5　三三六頁　四二〇圓　（三和書房）

＊經濟學敎科書の學び方　三一新書　宮川實・岡本博之・井上淸著　B40　二九〇頁　一二〇圓　（三一書房）

＊現代經濟學入門　下　河出新書　有澤廣巳他著　B40　二〇六頁　一二〇圓　（河出書房）

＊日本獨占資本と中小產業　大阪市立大學經濟研究所　二八三頁　三〇〇圓　（日本評論社）

＊景氣循環論　ハロッド著　宮崎義一・淺野榮一譯　A5　三一八頁　四〇〇圓　（東洋經濟新報社）

＊社會科學の諸問題　ソヴェト研究者協會編　A5　一七四頁　二八〇圓　（大月書店）

統計

＊統計學の基本方法　中川友長著　A5　一六五頁　二八〇圓　（三和書房）

財政・金融・保險・證券

＊金融論　經營學シリーズ　安田充著　B6　二九一頁　三三〇圓　（關書院）

＊保險論　改訂　印南博吉著　A5　二三四頁　三三〇圓　（三和書房）

＊租稅概論　前　改訂　A5　九六頁　一二〇圓　（三和書房）

＊財政學　經濟學全集14　大內兵衛・武田隆夫著　A5　二五六頁　三〇〇圓　（弘文堂）

＊豫算　らいぶらりしりいず　遠藤湘吉編　B6　二二四頁　二三〇圓　（有斐閣）

＊各國租稅制度概說　新版　加藤淸著　A5　三八七頁　六〇〇圓　（學陽書房）

商工業・經營・會計

＊地方自治會計實務講座4　收入　井上鼎著　A5　三〇〇頁　三二〇圓　（港出版合作社）

＊檢定簿記問題集　一—三級　一九五五年版　太田哲三編　A5　一四七頁　一二〇圓　（大藏出版KK）

＊原價計算論　佐藤孝一著　A5　四六二頁　五八〇圓　（中央經濟社）

＊新會計實務講座3　簿記　沼田嘉穗・戸田義郎・高松和男・阪本安一著　A5　二二二頁　二四〇圓　（春秋社）

＊經營學講座3　販賣管理　池田英次郎編　A5　三二四頁　四八〇圓　（巖松堂）

＊內部監査實務必携　ランバーティ（A・F）サーストン（J・B）著　ブリジストン株